

13 大谷木備一郎法学士逝く

〔法学新報〕第一二号 明治二十五年二月二十五日

○大谷木法学士逝く

社友法学士大谷木備一郎君逝く君曩きに神田区民の推す所となり衆議院の議員となるや日夜励精其職に従事し殆んど寢食を忘れ為めに疾に罹るに至る第一期議会の閉会を告ぐると同時に病勢頓に加重したるを以て君の親戚知友皆な之を憂ひ其全癒を祈らざるものなく名医の治療尽さる所なかりしかは一時稍快方に赴かれ吾人をして將に愁眉を開かしめんとせしか天遂に年を仮さず本月に入て病再び革り去る七日零時三十分を以て溘焉簣を易ふるに至れり法学社会又此名士を失ふ吾人は実に悼惜に堪へず吁悲夫